

# こころえる・わきまえる

藤 本 泉

## 1. はじめに

国立国語研究所1964では、「2.3精神および行為」として「2.306 認める 悟る わきまえる 心得る 気取る 読める」という分類がなされている。本稿では、こうした精神活動に関する動詞を心理動詞と呼ぶことにし、その中から今回は「こころえる」「わきまえる」の二語について考察したい。まずこの二つの動詞が使われている例をいくつか見ていただきたい。最初の例(1)は少し長いが同一の文で両語が使われている。

(1) ——いま考察した《人はどんな話題を好むか》

を、よく頭にいれて、これを実地の話題選択に  
応用することが相手を尊重するゆえんとなる。

その中でも、

相手に話させようとする場合

相手に聞かせようとする場合

によって、選択のしかたがちがわなければならない。前者の場合は、《人はどんな話題を話したがるか》を心得ていなければならないし、後の場合なら《人はどんな話題を聞きたがるか》をわきまえておくことが必要だ。

この用例において、二種類の心理動詞の意味に違いがあるだろうか。筆者には両語を入れ換えたとしても違いはないように思える。

しかし、「こころえる」「わきまえる」がいつも入れ換え可能かというところでもない。同じ出典からであるが、次の例を見ていただきたい。

(2) ……おやじさんは「二階から飛びおりて腰を

抜かしたこと」全体をとがめたのに、坊っちゃん  
は、二階から飛びおりて「腰をぬかしたこと」  
だけをしかられたものと心得、腰を抜かしさえ  
しなければ飛びおりてもよいものと思った。

(3) もし大勢を相手にしての話なら、「皆さん」でも「われわれ」でも「私たち」でもよい。とにかく、話の中に、聞き手を呼ぶコトバを登場させること、この方法を心得ておこう。

どちらも、「わきまえる」を使った場合どこかおかしい感じがする。この三つの用例から分かるように、両語はお互いに近い意味ではあるがなんらかの理由によって使い方の異なる場合があると考えられることができる。

「こころえる」や「わきまえる」のような心理動詞は、どのような方法で分析記述ができるであろうか。本稿では、作例を必要最小限にとどめ、できる限り多くの用例を集め、意味に違いがあるかどうかで分類する。そして、その分類に従って両語の入れ換えテストを行い、違いを考察していくことにする。

## 2. 用例の入れ換えテスト

用例は書籍、新聞、用例資料などから200近く集めた。以下に、「こころえる」と「わきまえる」各々につき10ずつあげる。このうち(4)から(13)までは、「こころえる」の用例で、(14)から(23)までは、「わきまえる」の用例である。これらについて両語の入れ換えを行い、違いがあるかないか、あるとすればどんな違いがあるかを考察する。なお、出典については〈注1〉を参照されたい。

(4) ……私など日本人ならば、どのように発表しようと、画期的な成果には価値があり、月並みはやはり月並みと思いがちになる。しかし、いくら画期的な成果でも、要領悪くごたごた話せば、その意義が伝わらないし、重要性が認められない。どだい、アメリカ人は話し下手には耳を傾けないのである。

アメリカの学生たちも、その点はよく心得ている。

(5) 男と男、義理も人情もちゃんと心得てる間柄なんだ。

(6) 一番はじめに、礼装の騎馬巡査が通行人を整理しながら、早足でやってきました。巡査はいつもはにこにこしている頬を今日はきっとひきしめて、あご紐を下唇のところにかけています。馬も手入れのいい毛並がつやつやとして、走ると筋肉が波立ちます。そのあちらこちらを軽快に駆けまわると、いかにもこの儀式の大切なことを心得ていて、さも自分で自分の上手な整理ぶりに感心しているかのようでした。

(7) 人に笑われない手紙を書くためには、いちおうの基本形を心得ておく必要があります。

(8) (アメリカの大学では)……質問することによ

って、学生は、「先生の授業に興味と関心をもっています」という積極的な意志表示をしている。また、教師も、学生の興味や関心に、誠意をもって応答するのが、自分の仕事だと心得ている。

- (9) 一通り料理を心得ている。
- (10) プールで楽しく過ごすためには、やはり利用者がマナーを守ることが一番。……人工呼吸も、監視員に頼るだけではなく、みんなが心得ておくべきことでしょうね。
- (11) 建設、国土両省庁は、市街化区域内の農地の宅地並み課税を強める方針だという。現在、A農地B農地は減税の恩恵をうけている。しかもその分の穴埋めに、地方交付税という形で私たちの税金が使われているのだ。不公平税制の典型、とっていいだろう。
- C農地にまで課税をひろげるのはいい。しかし、「営農家には10年の猶予」というのがくせものだ。これが、土地をもうけの対象と心得る人々の隠れみになる恐れはないか。
- (12) ……ひとつもてやろうと、寄って出た女給たちに、  
「オレたちは、北原白秋と山田耕作だぞ」と言い渡した。と、女給たち一同ハッとしたらしいが、サインでも求めにくと思いきや、言葉づかいと物腰とがばかいていねいになり、ちっとも寄りつかぬ。そんなにせずともと掃りしな勘定書を見ると、法外な金額を要求してある。はて不審なりと、よく問い正してみると、なんと女給連は、北原ハクシャクと山田コーシャクの御入来と心得たのだそう。
- (13) 「うん忘れずにいたまえ、必ず思いあたる事が出て来るから」  
「よろしい。心得たよ」
- (14) 神田明神で撮影することになった。定刻、この世界のトップモデルは一人で、タクシーに乗って現れた。  
舞台でみせるサイボーグのような表情を、かすかにはずかしそうにくずすと、こちらに向かってまっすぐ歩いてきた。いい足どりだ。171センチの長身は少しも揺れない。……  
撮影が始まった。シャッターの切られどきを、実にわきまえている。レンズの呼吸を感知して、それにぴたりと合わせて動く精妙なマシンのようだ。
- (15) もちろん、若いころとはちがって、辞書をひ

いてことばの意味をしらべる、といった作業の頻度は減っている。ふつうに読む書物に出ることばの意味くらいはおおむねわきまえているつもりだし、……

- (16) 話の目的や話す内容はあくまで話し手が主体ですが、話し方は聞き手が主体であるということです。このことをよくわきまえておかないと、正しい日本語を話しても、効果はあがらないということになります。
- (17) 義理人情のスジ道をわきまえているからこそ、身体こわした半ば職人を常雇いにしてたんだぞ。
- (18) こうした少数人種をめぐる問題を抱えながら、なおアメリカは移民を受け入れているのである。ベトナム難民を入れ、最近もキューバのいわゆる政治犯を引き受けることを決めた。中曽根発言が問題化した時、ワシントンで聞かれた最大の批判は「日本は経済力があるのに、われわれを移民させないではないか」というものだった。  
それは、文化の違いである。多くの日本人に、アメリカのすみずみの問題までわきまえて物を言えとは要求できないが、日本はいま、貿易問題を含めて“加害者”の立場に立っているという事実、それだけに、アメリカの苦しみの根底を知ってもよい時である。
- (19) 祝儀の席でエンギでもないことを言っはいけない、不祝儀の席で冗談を言ったりしてはいけない、と言われるのは、場面の性質をわきまえない発言はよくない効果を招く、ということを教えたものだ。
- (20) ……ものごとの是非善悪をわきまえたり、それに従って行動する能力……
- (21) 自分の気持ちを、時も所もわきまえずに表出するのを、日本人は誠実とはいわない。
- (22) モノゴトには順序がある。そのときそのときで必要な分量だけ、よく弁えて、少量ずつやるといい。前項で述べた「例文提示→ルールの説明→応用ドリル」の三課程でも、文法の説明は必要最少限にとどめておいてほしいのはそのためである。
- (23) ……授業中は前の席の人としゃべり続け、しゃべらないかと思うと紙を定規でピリピリ破き、手紙かなにかを書いている。少し静かになったと安心してると、そのうちグウグウでかいびきが聞こえてくる。……  
ちょっとこれでも受験生!!

場所をわきまえて行動してよね !!

これらの各語を入れ換えてみると表1のようになる。○は入れ換えても自然な文、×は不自然な文であることをしめす。なお、この入れ換えテストの判定は、筆者の内省によるものであることをことわっておく。

表1

用例番号	「わきまえる」を入れる	用例番号	「こころえる」を入れる
(4)	○	(14)	○
(5)	○	(15)	○
(6)	○	(16)	○
(7)	○	(17)	○
(8)	○	(18)	○
(9)	×	(19)	×
(10)	×	(20)	×
(11)	×	(21)	×
(12)	×	(22)	×
(13)	×	(23)	×

3. 分析

入れ換えると不自然な例について、最初に「こころえる」の用例から分析を進めたい。用例番号は逆からになるが、(13)から考えてみる。(13)に「わきまえる」を入れ換えた(24)を見ていただきたい。

(24) \*「よろしい。わきまえたよ。」

(13)における「こころえる」はどういうことを表しているのだろうか。用例の内容から考えてみると、「承知する」と言いかえられるような心理的な作用を表している。この作用は、「相手の言った内容」を、主体が自分の意識を働かせて「考えたり迷ったりした結果受け入れた」というわけではない。談話の中で相手の言った内容を「そのまま聞き入れた、承知した」というだけを表していると考えられる。つまりこの場合の「こころえる」は「主体が、話し相手の言った内容を、そのまま受け入れる」という意味であろう。この使い方は現代語法としてはやや固い感じがする。そして(24)から分かるようにこの意味で「わきまえる」は使えない。

では次に(12)に「わきまえる」を入れ換えた(29)ではどうか。

(29) \*なんと女給連は、北原ハクシャクと山田コーシャクの御入来とわきまえたのだそうな。

(12)における「こころえる」の意味を用例の内容から考えると、女給たちは二人の客の言った内容を、誤解ではあるが、自分たちなりの解釈で受けとめた、そのことをこの文の筆者が「こころえる」を使って表して

いる。この場合の「こころえる」は「主体が、相手の言った内容を、主体なりの考えで、受け入れる」と説明できるだろう。そして(29)で分かるようにこの場合も「わきまえる」は使えない。(12)の「こころえる」は(13)と「受け入れる」という意味の点で似ている。そこで(12)(13)を併せて「こころえる」は「主体が、相手の言った内容を、そのまま、または、主体なりの考えで受け入れる」としておこう。受け入れ方について「そのまま」と「主体なりの考え」とが、「こころえる」という動詞の用法上、はっきり異なるものであるかどうかについては、入れ換えテストだけでは分かり難い。従って、とりあえずここでは同じ意味として考えておく。

それでは(11)はどうか。「わきまえる」で入れ換えた次の例を見ていただきたい。

(20) \*これが、土地をもうけの対象とわきまえる人の隠れみのになる恐れはないか。

(11)の「こころえる」はこれまでのように主体とその話し相手がいるわけでなく、単に主体自身の心理的な作用を表す点が異なる。この用例では、「主体が土地を金もうけの手段として考える」ことを「こころえる」は表している。対象についてどう考えようと、この場合は相手がないのであるから主体の自由であり、要するに主体の思う通りに対象を受け入れてかまわないのである。そして、どう受け入れるかという内容を「〜と」で表している。つまり、(11)のような「こころえる」は「主体が、対象を、主体の思いのままに、受けとめる」ことを表しているといえよう。受け入れ方は主体の自由であるから、社会的な規範に反するような受け入れ方を主体がすることも(11)のようになりうる。この場合も「わきまえる」にするとおかしい。(11)の「こころえる」は、話し相手との関連がないことが、いままでの(13)(12)とは異なるが、対象を受け入れるという点ではよく似ている。つまり、話し相手の言葉に関してであってもそうでなくても、対象はある事柄を表し、それを主体が受け入れるのだが、受け入れ方が対象をそのまま受け入れたたり、主体なりに考えて受け入れたりする。それが、誤解であったり社会的な規範に合わなかったりする場合もある。以上のことから「こころえる」を次のようにまとめておこう。

① 主体が、対象を、そのまま、または、主体なりの考えで、受け入れる。

さて、入れ換えテストで×となったもので、残った二つについて考えてみたい。

(27) \*人工呼吸も、監視員に頼るだけでなく、みんながわきまえておくべきことでしょう。

(20) \*一通り料理をわきまえている。

この二つの例には対象に共通点がある。まず(10)は対象が「人工呼吸」で、それを「身につける」ということを「こころえる」と言い、(9)では対象が「料理」で、それを「身につける」ということを「こころえる」で表している。どちらの例にも共通しているのは、なんらかの手続きを踏んでいく必要のあるものが対象になり、それを、主体が経験や練習によって「身につける」という点であろう。本稿では対象のそうした性質を「手続き性」と呼ぶことにする。これまでの例では、主体が対象を「承知する、受け入れる」ことを「こころえる」は表したが、その対象は「手続き」といったような性質ではない。また、対象となる事柄を受け入れるのに時間的な長さを必要とするとは思われない。しかし、(10)(9)の「こころえる」は「手続き」という性質を持った対象を経験したり練習したりして時間をかけ、その結果主体がそれを受け入れる、つまり「身につける」ことを「こころえる」は表しているといえよう。そして、この場合も「わきまえる」ではおかしいのである。

以上から「こころえる」の二番目の意味として次のようにまとめておくことにする。

② 主体が、経験や練習などによって、対象（手続き性）を、身につける。

次に「わきまえる」の用例に「こころえる」を入れ換えて不自然になる場合を見てみよう。(19)に「こころえる」を入れると次のようになる。

(29) \*場面の性質をこころえない発言はよくない効果を招くということを教えたものだ。

この場合(19)の文脈から判断して、対象である「場面の性質」には方法、順序などの「手続き性」が考え難い。従って「こころえる」を①②の意味で言い直して(19)に入れた次の文はどちらも自然ではない。

(30) \*場面の性質を受け入れない発言はよくない効果を招く。

(31) \*場面の性質を身につけない発言はよくない効果を招く。

こうしたことから「場面の性質」という対象は「こころえる」とは結び付かないと考えられる。しかし、次のように、「こころえる」の②の意味で対象を書き直してみた(32)は長ったらしく聞こえるが意味は分かる。

(32) 場面の性質にふさわしい話題の出し方をこころえないで発言するのはよくない効果を招く。

そうすると、(19)の「わきまえる」はどんな心理的な作用を表しているのだろうか。用例をよく読んで考え

てみると、この文は「場面の性質」にあわない不適切な「発言」は「よくない効果を招く」、つまり、「場面の性質を考えずに不適切な発言をするのはよくない効果を招く」と述べているのである。主体が対象について適・不適を意識を働かせて考えるというような心理作用を「わきまえる」は表しているといえよう。

次に(20)を「こころえる」で入れ換えた(33)についてはどうだろうか。

(33) \*ものごとの是非善悪をこころえたり、それに従って行動する能力……

この文でも対象の「是非善悪」は「こころえる」とは結びつきが悪いようである。「こころえる」を今までの分析によって言いかえると(34)のようになろう。

(34) \*ものごとの是非善悪を受け入れたり、身につけたり、それに従って行動する能力……

これが不自然に感じられるのは、「是非善悪を」つまり「是非か、善か悪かを」というような選択を求める対象の後では、それを「受け入れる」とか「身につける」という言葉とは意味の結びつきが悪いからであると思われる。むしろ、その対象を「考えてどちらか正しい、適切な方を決める、見分ける」と言う方が自然であろう。この場合も「わきまえる」は主体自身の意識を働かせなければならない。

次に(21)(22)(23)について「こころえる」を入れてみた例を考えてみよう。

(35) \*自分の気持ちを、時も所もこころえずに表出するのを、日本人は誠実とは言わない。

(36) \*そのときそのときに必要な分量だけ、よくこころえて、少量ずつやるといい。

(37) \*場所をこころえて行動してよね!!

対象となっている表現をよく見ると「時も所も」「必要な分量だけ」「場所を」というようにどれも、「よく考えて正しい、適切なものを決める、見分ける必要のあるもの」であり、「受け入れる」とか「身につける」という性質のものではない。(21)ではどういう時や所では自分の気持ちを表出することがふさわしくないかを見分けるのであり、(22)では、必要な分量をよく考えて適切に決めることであり、(23)ではその場所にふさわしい行動かどうかを考えて適切にふるまうことを述べている。こうした考察から「わきまえる」の対象は「AかBのどちらが適切か」とか「対象をどうするのが正しいか」「どんな対象が正しいか」というような何らかの「判定」を必要とする性質があることが分かる。対象のこの性質を「判定必要性」と呼ぶことにする。「わきまえる」は主体自身の意識を働かせて「判定必

要性」のある対象について考え、決めたり見分けたりするような心理的な作用を表していると言えよう。以上から、「わきまえる」を次のようにまとめておく。

- ① 主体が、対象(判定必要性)をよく考えて、正しい適切なものを決める、見分ける。という説明ができる。

#### 4. 文型

これまでの用例を観察すると、「こころえる」「わきまえる」は共通して、基本的には次の文型をとる。

(38) NP<sub>1</sub>ガ NP<sub>2</sub>ヲ NP<sub>3</sub>ト こころえる／わきまえる

NPは名詞句を表す。NP<sub>1</sub>は、「こころえる」「わきまえる」両心理動詞の作用主体を示す。NP<sub>2</sub>は対象となる事柄を示す。NP<sub>3</sub>は心理動詞の作用の内容を示す。つまり、この文型は言いかえれば「主体が、対象を、何々と、こころえる／わきまえる」という形の文である。

しかし、実際の用例にあたってみると、両心理動詞とも必ずしもこの文型に従っているわけではなく、三つの名詞句のどれかがない場合が多い。主体NP<sub>1</sub>は場面によって分かれば省略されると考えてよいが、対象NP<sub>2</sub>と作用の内容NP<sub>3</sub>も単に場面で分かっているなら省略できると言えるのであろうか。以下では、これらの名詞句と、両心理動詞の持つ意味との関わりについて考えてみたい。

「こころえる」について、よく使われる形の一つに「NP<sub>1</sub>ガ NP<sub>2</sub>ヲ NP<sub>3</sub>ト」を言わないで、動詞とその補助形式だけの文がある。

- (13) よろしい。こころえたよ。  
(24) \*よろしい。わきまえたよ。  
(39) こころえました。  
(40) \*わきまえました。  
(41) 万事こころえた。  
(42) \*万事わきまえた。

このような文型は例えば(13)のように談話の中で、話し相手の述べた内容について主体がそのまま受け入れたことを表明する時に使われる。これに近い意味を持つものとして「承知する」がある。ただし、「こころえる」を使う方が現代語としては固い感じがする。(39)(41)は実例ではないので場面は分からないが、談話の中で使われる表現であることは想像に難くない。ともかくこの場合主体NP<sub>1</sub>は談話の中の聞き手にあたる人、対象NP<sub>2</sub>は話し手の言った事柄である。これらの名詞句は談話の中では省略されるのが普通であろう。(41)の「万事」は対象と考えられるが、その場面での具体的な対

象を述べる代わりに使う慣用的な語であり、「万事」のほかに、「委細」「すべて」などがある。この文型は対象をそのまま受け入れるので、あえて「NP<sub>3</sub>ト」を使って受け入れる内容を相手に伝える必要はない。つまり「そのまま」という内容で受け入れるので「NP<sub>3</sub>ト」を述べる必要はないのである。しかし、(24)(40)(42)のように「わきまえる」ではこのような言い方はしない。その理由は、「わきまえる」には「こころえる」のように、談話について対象を「そのまま」自分の意識を働かせずに「受け入れる」ような心理的作用は表わさないからであろう。3.の分析で述べたように「わきまえる」は主体が意識を働かせ、考えることが必要な心理的作用を表しているからである。

次に「NP<sub>1</sub>ガ NP<sub>2</sub>ヲ NP<sub>3</sub>ト こころえる」という文型を考察していきたい。用例(8)(11)の文脈を参考にして作った(44)(45)を見ていただきたい。

- (44) あの教師は、学生の興味や関心に誠意をもって応答することを、自分の仕事だと、こころえている。  
(45) 彼らは、土地を、もうけの対象と、こころえている。

まず気が付くのは、どちらの場合も、「こころえる」は先にあげた①の「受け入れる」の意味で使われていることである。なぜなら対象がどちらも「手続き」といえるものではなく、従って②の「身につける」の意味とは考え難いからである。そして、ここで注目して頂きたいのはその受け入れ方である。どちらの文も対象を「そのまま」ではなく、対象を主体が「主体なりの考えで、受け入れる」のである。その受け入れ方、つまり受け入れるという心理作用の内容がNP<sub>3</sub>で表されている。ということは、3.の分析で示した「こころえる」の①の意味「主体が、対象を、そのまま、または、主体なりの考えで、受け入れる」において、受け入れ方が「主体なりに考える」という場合は、「NP<sub>2</sub>ヲ NP<sub>3</sub>ト」を必要とすることになる。そしてこの文型でNP<sub>3</sub>を省略すると意味が分かり難くなる。もっとも(12)のように文脈からすでに分かっていると言わないことは可能である。しかし、そうした文脈がない限り、この二つの名詞句のどちらかを省略することはできない。

- (46) 'あの教師は、学生の興味や関心に誠意をもって応答することを、こころえている。  
(47) \*あの教師は、自分の仕事と、こころえている。  
(48) '彼らは、土地を、こころえている。  
(49) \*彼らは、もうけの対象と、こころえている。

(48)はどのような意味であろうか。対象を「学生の興味や関心に誠意をもって応答すること(方法)」というように、「手続き」という性格を認めて②の意味で「こころえる」を解釈するとも可能だが、やや無理な気がするし、文脈とは異なった文になってしまう。(48)の場合は対象の「土地」について「土地(を使ったもうけ方)」というような「手続き性」を認めるならやはり、②の意味で解釈できよう。しかし、この場合も無理やりに解釈したという感じがするし、文脈とは合わない。(47)(49)は文脈から対象が分かればよいがそうでなければ非文である。しかし、「～ト」を「～ヲ」にすると自然な文になる。この点についてはこの後で考察する。

以上の考察から、「こころえる」の①は二つに分けた方が妥当であろう。また、必要とする文型もあげてみる。( )は普通は省略することを表す。

①a 談話において、主体が、対象を、そのまま受け入れる、承知する。

文型 「(NP<sub>1</sub>ガ) (NP<sub>2</sub>ヲ) こころえる」

①b 主体が、対象を、主体なりの考えで、受け入れる。

文型 「NP<sub>1</sub>ガ NP<sub>2</sub>ヲ NP<sub>3</sub>ト こころえる」

ここで、(47)(49)について、「～ト」を「～ヲ」にすると、不自然ではなくなると述べたことについて考えてみたい。(50)(51)を見て頂きたい。

(50) あの教師は 自分の仕事を こころえている。

この「こころえる」の意味は①bなのだろうか。もしそうなら「自分の仕事を自分なりの考えで受け入れる」ということだが、文脈のなかで内容NP<sub>3</sub>が分からなければこの意味には受け取れない。例えば(51)ならば分かる。

(51) あの教師は 自分の仕事を 聖職と こころえている。

しかし(50)のようにNP<sub>3</sub>がない場合は①bの意味にはとれない。それよりも対象の解釈をかえて「自分の仕事のやり方、手順」と考え、「手続き性」があるものとして、経験によってそれを身につけるという意味を(50)の「こころえる」は表しているように思われる。つまり、(50)の「こころえる」は②の「経験で身につける」の意味である。では、次の例ではどうだろうか。

(52) 彼らは もうけの対象(土地)を こころえている。

①bの意味とすると、「もうけの対象(土地)を自分なりの考えで受け入れる」となるが、やはり文脈の中で内容NP<sub>3</sub>が分からなければならない。例えば、(53)なら分かる。

(53) 彼らは もうけの対象(土地)を こころえる 金庫と こころえている

しかし(52)のようにNP<sub>3</sub>がない場合は①bの意味にはとれない。それよりも対象の解釈をあえて「もうけの対象(土地)の扱い方」と考え、「手続き性」があるものとして、経験によってそれを身につけるという意味ならば(52)の「こころえる」は自然である。つまり(52)の「こころえる」も②の意味であるといえる。

以上から、NP<sub>3</sub>のない(50)(51)は対象に「手続き」という性格があると考えることができ、その意味は②であるということになる。以上から「NP<sub>1</sub>ガ NP<sub>2</sub>ヲ こころえる」という文型は①aと②の意味のときに使われることが明らかとなった。なお文脈によっては②の意味でも「NP<sub>1</sub>」や「NP<sub>2</sub>ヲ」を省略できる。例えば、次の(54)(55)では「NP<sub>1</sub>」と「NP<sub>2</sub>」が省略されており、(56)では「NP<sub>2</sub>」が省略されている。

(54) こころえたものだ

(55) わが家の救急薬品に、梅干しと梅酢があります。先日も木の下で草むしりをしていましたら、バリバリとまゆ毛の辺に激しい痛み。ケムシにやられたのです。家の中へ駆け込みながら「梅干し」と叫ぶ。嫁も心得ていて、梅干しを一つつまみ出し、「ハチですか」とかけ寄る。

(54)の「こころえる」の主体はこの文を発話した人ではなく、これを言われた人であろう。その人の作法のような何かの手順がきちんとしているのに感心して、(54)のように言ったと想像できる。この場合「NP<sub>1</sub>ガ NP<sub>2</sub>ヲ」は場面で分かるので表す必要はない。(55)では、対象は「梅干しを持って来てと言われたら虫に刺されたことを意味すること」または「梅干しは虫さされにきくこと」のどちらかであろう。いずれにせよ、②の意味で経験から対象を知る、つまり「身につける」ことを表す。以上から「こころえる」の②について意味と文型をあわせて次のようにまとめることができよう。

② 主体が、経験や練習などによって、対象(手続き性)を、身につける。

文型 「NP<sub>1</sub>ガ NP<sub>2</sub>ヲ こころえる」

次に「わかまえる」のとり文型を考えてみたい。やはり(38)であげた文型をとるが、前に述べたように三つの名詞句を省略した言い方は不自然である。

(24) \*よろしい。わかまえたよ。

(40) \*わかまえました。

これは「わかまえる」が「こころえる」のように、談話の中で、その場ですぐ対象を「そのまま」受け入れるというような心理的作用は表さないからというの

が一つの理由であろう。

ところで用例を観察すると「わきまえる」には「NP<sub>1</sub>ガ NP<sub>2</sub>ヲ わきまえる」という文型が圧倒的に多い。この型の対象NP<sub>2</sub>の性質は、3.の分析の所でも述べたように「判定必要性」があることである。このことを例を使ってもう一度確認してみよう。

(27) \*人工呼吸も 監視員に頼るだけでなく みんながわきまえておくべきことでしょう。

(28) \*一通り料理をわきまえている。

これらの対象に注目すると(27)は「人工呼吸(の方法)」、(28)は「料理(の方法)」のように「手続き性」を持つが「判定必要性」を持つとは考え難いので、「わきまえる」では不自然である。対象に「判定必要性」があるとはどういう意味か、(14)から(23)までの用例で具体的に考えてみよう。(14)の対象は「シャッターの切られどき(いつシャッターが切られるか)」という判定を要求するものであり、(15)では「言葉の意味(どういう意味の言葉か)」という判定を要求する。同様にして、(16)では「話し方は聞き手が主体であるということ(がいかかに正しいか)」、(17)では「義理人情のスジ道(義理人情を正しく判断するためどのような道筋をとるのが正しいか)」、(18)では「アメリカのすみずみの問題(についてどのように正しく理解するか)」、(19)では「場面の性質(をどのように適切に判断するか)」、(20)では「是非善悪(何が是で何が非か、何が善で何が悪か)」、(21)では「時も所も(どんな時や所が適切か)」、(22)では「必要な分量(どの程度の分量が適切か)」、(23)では「場所(どんな場所が適切か)」などが、対象NP<sub>2</sub>における「判定必要性」と考えられる。「わきまえる」と共起するヲ格名詞句にはこうした「判定必要性」があると考えると良いだろう。

さて、対象を判定する必要性があったとしても、人がそれを判定するには、その規準となるものが必要ではないだろうか。「わきまえる」の意味は3.の分析によると「主体が、対象(判定必要性)をよく考えて、正しい適切なものを決める、見分ける」であるが、「正しい」とか「適切な」とかいうのは何か規準がなければ言うことはできないはずである。いったいその規準とは何なのか、「わきまえる」のもう一つの文型について観察することでどんな規準があるのか考えてみよう。

これまでとりあげた用例の中には「NP<sub>1</sub>ガ NP<sub>2</sub>ヲ NP<sub>3</sub>ト わきまえる」という文型がなかった。「こころえる」にはよく見られたのに、「わきまえる」に関しては、採集した用例の中で、この形は次の(56)しか見つかっていない。時代劇の小説の中の用例であり、やや固

い表現ではあるが現代語としても不自然ではないので考察に使うことにする。

(56) およそ今、天下に虻や蜂ほど多い武芸者のうちでも、宝蔵院という名は実によく響いている。もしその宝蔵院を単なるお寺の名としか弁えないて話したり聞いたりしている兵法者があるとしたら、すぐ、

(こいつ潜りだな)

と、扱われてしまうほどにである。

NP<sub>2</sub>にあたるのは「宝蔵院」であるが、この対象には「判定必要性」が考え難い。つまり、それをどう考えようとするのかはNP<sub>2</sub>だけでは分からない。そのためNP<sub>3</sub>によって「単なるお寺の名」という判定の内容を明らかにしなければならないのである。つまり、「宝蔵院を、単なるお寺の名(と考えるのが正しいかどうか)」という「判定必要性」がある。「NP<sub>2</sub>ヲ NP<sub>3</sub>ト」の形は「わきまえる」の「判定必要性」を表すわけである。NP<sub>2</sub>だけのときは、「判定必要性」はNP<sub>2</sub>にあるが、NP<sub>2</sub>だけでは「判定必要性」がよく分からないときは、NP<sub>3</sub>を加えてそれをより明確に表すのである。とすると、「NP<sub>2</sub>ヲ NP<sub>3</sub>ト わきまえる」の文型を探れば、どういうものが判定の規準なのか、「NP<sub>2</sub>ヲ わきまえる」の例文から考えるよりも「判定必要性」が明示されているので、考えやすいのではないだろうか。そこで、用例がないので、いくつかの作例によって判定規準について考えていきたい。

(57) あの教師は 学生の興味や関心に誠意をもって応答することを 自分の仕事と わきまえている。

(58) \*あの教師は 学生の興味や関心に誠意をもって応答することを 自分の仕事ではないと わきまえている。

(58)は意味が不自然である。なぜなら、常識から考えて、「誠意をもって応答することを、自分の仕事ではない」と判定するのは教師として正しい考え方とは言えないからである。次の例ではどうだろうか。

(59) \*彼は 土地を もうけの対象と わきまえている。

(60) 彼は 土地を もうけの対象ではないと わきまえている。

土地をもうけの対象と判定するのは社会的な規準に反することであり、正しい判定とはいえない。従って(59)は不自然である。3.の分析で述べたように「わきまえる」という心理作用は「正しい、適切な」判定を表すのである。その規準としてまずあげられるのは社会

的な常識とか規範であるといつてよいだろう。では次の場合はどうだろうか。

(61) あの選手は この記録を 自分の限界と わきま えている。

(62) あの選手は この記録を 自分の限界ではないと わきま えている。

この場合はどちらも、不自然ではない。真実はどうであれ、自分の記録が限界か限界でないかは、主体自身の考えによる判定であり、この場合の規準は主体自身の中にある。

(63) 先生は 私の点数を 限界だと わきま えている。

(64) 先生は 私の点数を 限界ではないと わきま えている。

この場合はどちらも、やや不自然な感じがする。というのは、「わきまえる」という心理作用を行う主体は「先生」であるが、その判定内容は「私」でなければ分からないことであり、「先生」がはたして正しく判定できるのかどうか、この文だけでは不明だからである。次の例ではどうであろうか。

(65) 私は 自分の性格を 短気でそそっかしいと わきま えています。

(66) 私は 彼の性格を 短気でそそっかしいと わきま えています

(65)のように自分の性格を自分が判定するのはおかしくない。もっとも、何度も言うようにそれが真実かどうかは分からない。ところが、たとえ真実だとしても、(66)のように他の人の性格を判定するのは、その人とはほど親しくて、よく知っていなければならず、この文だけではやや不自然さを感じる。つまり、真実はどうあれ、主体が、主体自身の能力、性質などに関することを判定するといふときに、「わきまえる」を使うことは可能である。しかし、主体が、他人の個人的な能力や性質を判定するときには「わきまえる」は使い難い。この場合の対象は主体自身のものという条件があるといえるだろう。他人の事柄については正しい判定はできないと考えるためである。以上の考察は、用例(65)一つなので今後の用例採集による確認作業が必要であろう。

これまでのことをまとめると、「わきまえる」という心理的な作用を主体がするときには、対象の表す「判定必要性」を正しく決めるために、「社会的な常識や規範」か「主体が主体自身で認識できる、自己の規準」の二つの判定規準があると考えられる。この判定規準は、「NP<sub>1</sub>ガ NP<sub>2</sub>ヲ わきまえる」という文型のとき

も同じであろう。例えば、(14)や(15)では「自己の規準」によっているし、(20)や(21)や(56)は「社会的な規準」によっているのである。「わきまえる」の意味と文型をまとめると次のようになる。

① 主体が、対象(判定必要性)をよく考えて、(社会的な規準にそつて、または主体自身に関わる対象については、主体が認識する規準にそつて)正しい適切なものを、決める、見分ける。

文型 「NP<sub>1</sub>ガ NP<sub>2</sub>ヲ わきまえる」

「NP<sub>1</sub>ガ NP<sub>2</sub>ヲ NP<sub>3</sub>ト わきまえる」

## 5. おわりに

「こころえる」と「わきまえる」の用例の入れ換えテストによつて、大まかの意味を分析し、文型について考えることによつてさらにそれを深めることができたように思う。一応ここで両語についてまとめておこう。

### ●「こころえる」

① a 談話において、主体が、対象を、そのまま、受け入れる、承知する。

文型 「(NP<sub>1</sub>ガ) (NP<sub>2</sub>ヲ) こころえる」

① b 主体が、対象を、主体なりの考えで、受け入れる。

文型 「NP<sub>1</sub>ガ NP<sub>2</sub>ヲ NP<sub>3</sub>ト こころえる」

② 主体が、経験や練習などによつて、対象(手続き性)を、身につける。

文型 「NP<sub>1</sub>ガ NP<sub>2</sub>ヲ こころえる」

### ●「わきまえる」

① 主体が、対象(判定必要性)をよく考えて、(社会的な規準にそつて、または主体自身に関わる対象については、主体が認識する規準にそつて)正しい適切なものを、決める、見分ける。

文型 「NP<sub>1</sub>ガ NP<sub>2</sub>ヲ わきまえる」

「NP<sub>1</sub>ガ NP<sub>2</sub>ヲ NP<sub>3</sub>ト わきまえる」

以上のような結果を見ると両語の意味はかなり明確に区別できるような気がする。ところが、用例の入れ換えテストで、入れ換えても意味がさほど変わらない感じのしたもののがかなりある。もう一度○のついた例を見て頂きたい。これまで、対象について「手続き性」とか「判定必要性」などかなり細かく考えたが、実際にはどちらともとれるものが多い。例えば(7)における対象「手紙の基本形」は「いろいろな形の基本形」というように「手続き性」を持つと解釈すれば「こころえる」の②の意味となるし、「正しい基本形」というような「判定必要性」を持つと解釈すれば「わきまえる」で入れ換えても意味は分かる。

またもう一度用例を見ると、両語とも状態の継続を

表す「～ている」の形をとりやすいことが分かる。考えてみると、両語とも仕方は異なるが、心理的な作用の結果、心に新しい事柄が存在するという点では同じである。国研1964で同じグループにまとめられているのも、このためであろう。「～ている」の形をとると、両語とも「手続き性」とか「判定必要性」などを考えるというような作用の過程に視点があるのではなく、その結果に視点に移り、心の中に新しい事柄が存在するという点だけを表すような場合も多いのではなからうか。そうなると、両語の意味的な違いが薄れ、入れ換えても同じと思われるような場合もあるだろう。この点については、さらに多くの心理動詞を分析し、かつそれに続く補助表現についても考察を広げねばなるまい。

本稿では作例を最小限にとどめ、用例に基づいて分析を進めてきた。部分的な引用では分かりにくいという意見もあるが、だからといって作例の方が分かりやすく分析に適していると言える根拠にはなるまい。用例を集めることから始め、それを分類する作業をしてきたが、(56)の用例一つだけで、「わきまえる」のこの場合の文型を考えたが、作例だけの考察は木を見て森を見ずのようで好ましいとは思えない。この文型についての用例を集める努力を続けたい。

用例を集め、入れ換えテストをするといった分析の方法についてもまだ問題があるかもしれない。「日本語研究」第6号によせられた森田良行氏の「同じ文脈で語を挿し替えて表現として成り立つか否かを判断することも大事でしょうが、私にはどうも自然科学における試料の実験のように見えてなりません。実験だけでは現象の背後にある“ものの本質”をつかむことはむずかしいでしょう」という意見に真剣に耳を傾けていきたい。

<注1> 用例は長めに引用する。前後関係をできるだけ正確に知って判断したいからである。なお考察の対象にした用例は、集めたものすべてではなく、現代の用法として不適当なもの、通常の用法から著しく離れていると思われるものは除いてある。これは当然のことと思われるが、実例を多く使うからと言って不適当な用法もすべて対象としたのではないことを明記しておく。

- (1) 金田一春彦 「話し言葉の技術」 講談社学術文庫 p.140
- (2) 同 p.70
- (3) 同 p.254
- (4) 読売新聞 1984年3月12日 江崎玲於奈

「ニューヨークから」より

- (5) 芳賀綏代表 荻野他作成 「昭和東京語会話資料」より
- (6) 竹山道雄 「ビルマの竖琴」 新潮文庫 p.87
- (7) 佐伯梅友他監修 「作文挨拶全書」 ユニート出版 p.3
- (8) 直塚玲子 「欧米人が沈黙するとき」 大修館書店 p.6
- (9) 研究社 「新和英大辞典第四版」 1974「こころえる」より
- (10) 読売新聞 1984年7月5日 「奥さんルポ：プールの安全・衛生管理はどうかしら」
- (11) 朝日新聞 「天声人語」 1981年10月14日
- (12) (1)と同書 p.194
- (13) 夏目漱石全集 第七巻 「明暗」 岩波書店 p.540  
(表記を一部変更してある。)
- (14) 読売新聞夕刊 1985年12月16日 「世界のトップモデルとお神楽—山口小夜子さん」
- (15) 明治書院 「日本語学」 1983年6月 p.4
- (16) 永崎一則 「話力で自分を大きく伸ばす」 実務教育出版p.124
- (17) 前出 「昭和東京語会話資料」
- (18) 読売新聞 1986年10月2日 「米の苦しみに理解を」
- (19) (1)と同書 p.61
- (20) 植村俊亮 1974 「電子計算機による自動索引の研究」より
- (21) 我妻洋 「日本人とアメリカ人ここが大違い」 文藝春秋 p.116
- (22) 長島達也 「日本語教授法入門」 パナリంగా出版 p.122
- (23) 読売新聞夕刊 1984年8月9日 投書欄 「場所をわきまえてよ!!」
- (39) 研究社 「新和英大辞典第四版」 1974「こころえる」より
- (41) 「岩波国語辞典第三版」 「こころえる」より
- (54) 研究社 「新和英大辞典第四版」 1974「こころえる」より
- (55) 読売新聞 1986年9月6日 投書 「虫さされに梅干し」
- (56) 吉川英治全集15 「宮本武蔵(-)」 p.170

<注2> 金田一氏に直接お会いする機会があり次のようなお話を伺った。「この場合は、どちらも同